



長良川の舟運①

桑名・名古屋へ物資を 運んだ多くの川船

現在、物資の輸送は、トラック輸送や貨物列車が中心ですが、「明治・大正の頃は馬車や荷車が担っていたらどう」と誰しも思うところですか。

しかし昭和初期までは、その殆どを川船が担っていました。河川が網の目のように広がり、一方、道路網は整備されていなかったからです。どのような物がどこへ、どんな船でどのように運ばれていたのでしょうか。

1. 明治14（1881）年の現岐阜市域の川湊（河岸場）の様子

下の図は当時の川湊を示したものです。これを見ると、長良川本流はもちろんです。支流の武儀川、伊自良川、板屋川、荒田川の川沿いの村々からも、それぞれ川船が出ていたことが分かります。船の形は全て鵜飼形船で、長良川本流を行き来する船の大きさは長さ10mから14m、幅は1.2mから1.8mのものがほとんどで、最



大の船は長さ16m幅2.8mでした。水量が少ない支流や、浅瀬が多い上流域の近距離間を行き来する船は、長さ7m幅1.2mぐらいのものが多かったようです。積み込まれる物資も川湊の地域や行き先によって様々ですが、山間部や支流沿いの湊からは米、薪（割り木）や炭、竹や木材、柴木、川石、茶などが、

都市部の岐阜、竹鼻、桑名、四日市、名古屋（熱田）などへ運ばれました。また岐阜や加納（長刀堀）などからは、上有知（美濃市）などから運び込まれる物の他、それらを素材に



忠節橋から上流を望む

して加工された特産物（和傘や提灯など）も下流の桑名、四日市、名古屋などへ積み込まれました。

2. 長良川の舟運のようす

長良川上流の上有知湊（美濃市）などの川湊からは、明治以後も、美濃和紙や曾代糸（生糸）、茶、林産物などが積み出され、桑名や四日市、名古屋（熱田）など伊勢湾の湊町と往來を頻繁にしていました。そのため、岐阜市域の川湊からの川船を入れると、長良川を行き来する川船は益々多くなりました。

また長良川筋だけでなく、多くの船が掛斐川筋の大垣や木曾川筋の笠松なども行き来していました。三

川分流工事前の時点では（明治20年まで）、木曾川と長良川は現在の東海大橋のやや上流で合流し、木曾三川公園の付近で掛斐川と合流するなど、三川が繋がっていたのです。そして物資を運ぶ川船が三川を行き来して

いました。

川沿いには犬山、笠松、岐阜、大垣、桑名などの多くの市場が控えていて、名古屋や四日市とも結ばれていました。そして、全国各地に送られていたのです。

その後、明治35年（1902）に三川分流の扉・船頭平閘門が完成し、木曾川と長良川を行き来する舟運に重要な役割を果たしました。

武儀川沿いの中屋から桑名へと行き来した川船については、「午前6時

に発し、翌午後4時頃達す。」とあり、岐阜、長良湊から桑名までは約30時間程必要だったようです。

3. 薪や炭などを名古屋まで運ぶ

長良川上流域から、名古屋、瀬戸、桑名、常滑などへ運ばれる物資の多くは薪や炭でした。家庭用燃料や焼き物の燃料として使われました。その意味では、名古屋など都市部のエネルギーを支えていたと言えます。郡上郡や山県郡などで生産された薪と炭は、河岸問屋のあった小笠野湊や上流域の中継地点であった芥見・町屋まで、舟や馬車で運ばれて来

ました。実際、岐阜市芥見の河原や土堤には、地元の物の他、関や美濃方面から運ばれてきた薪が見わたす限り積み上げられていました。この薪は、芥見・町屋の荷船によって名古屋へ運ばれ、さらに瀬戸までも運ばれたようです。

り積み上げられていました。この薪は、芥見・町屋の荷船によって名古屋へ運ばれ、さらに瀬戸までも運ばれたようです。

芥見・町屋と名古屋の間を往復した荷船の船頭さんの話

私が船に乗り始めたのは14歳の時（明治40年11907）で、名古屋へ初めて行ったのは15歳の時でした。それから38歳の昭和6年（1931）まで町屋（芥見）と名古屋の間を何度往復したでしょうか。

芥見から大船に荷物を積むには、二箇所ほど浅い瀬があり底がつかえるので、殆ど瀬取り船（比較的小さい船）で下流の河渡の湊まで運び、そこで大船に積み換えて名古屋まで運びました。

千本松原の下の福原で三川分流の扉（船頭平閘門）を開けてもらい、木曾川に入り木曾崎村から海に出ました。時には長良川をそのまま下り、桑名から海へ行ったこともあります。

木曾崎から和泉を通り、今の尾張大橋の下から鍋田へ入り、名古屋港へ行きました。それから、さらに堀川運河を上り、お城（名古屋城）のすぐ下、明堂橋まで行っていたのです。芥見から四日かかりました。帰りは荷の都合で多少は違いましたが、大体十日位かかり船には野菜、醤油、

味噌に漬物、炭、薪、酢と一通りは積んでいきました。米は一斗二升、水まで積んで帰りました。船の中の生活でした。途中では、水を補うことと野菜をちよっと買うくらいでした。三度の食事はもちろん、自炊でおかずの少ない時代でしたから、一日八合の米をペロリと平らげました。：（略）

●今回は、岐阜からどんな荷物がどのように川を下り、桑名や名古屋まで運ばれたのかを中心にまとめました。

次号では、紹介しきれなかった灰船や石船のこと、また桑名や名古屋などに行った船が今度は何を積んで、どのような方法で川上に向かって帰って来たのかを紹介したいと思います。

○この文章は、「岐阜県史・通史編・近代下」「岐阜市史・史料編・近代下」「長良川水系の河川水運」「古老に聞く」などをとくに、後藤征夫がまとめました。

岐阜市歴史博物館ボランティア
「お話・岐阜の歴史サークル」
代表 後藤 征夫
http://book.geocities.jp/gifu_ekishi/eksistop.htm
TEL 058-231-6726



大正中期の奥長良の風景



芥見・町屋の川岸